

## 15) ゲッケイジュ＝月桂樹

ゲッケイジュはクスノキ科の常緑小高木で、地中海沿岸地域および西アジアを原産とし、高さ 15m にも及ぶ。葉は革質で細長く先端が尖り、長さは 10cm ほどである。雌雄異株で日本でも古くから栽培されているものの、あまり雌株を見ることはない。初夏 5～6 月頃に淡黄白色の花を群がって咲かせ、秋になると雌株は暗紫色の実をつける。ゲッケイジュの名は漢名に基づいたもので、中国ではこの名称は他の植物の名前である。中国の伝説、『酉陽雜俎』（ユウヨウザツ）には、仙人に師事して仙術を学んでいた呉剛(ゴゴウ)という男がいて、自分の犯した罪を償うために、伐っても伐っても元に戻ってしまう月面に生えている桂の木に、いつまでも斧を振るっていたという話が伝わっている。このため中国では月面の濃淡の、影の部分には桂の木が生えていると考えられていた。これが『月桂樹』の所以である。この話は早くから日本にも伝わっていたが、中国の桂は、日本ではモクセイにあたることを知らずに、桂はカツラであると思いこんでいた。時代が下って江戸時代になると、本草学者は桂がモクセイの類であることに気づき始めた。一方、明治 38 年にフランスから渡来した木がモクセイに似ており、芳香のあるところから、中国の伝説の木『月桂樹』という名前をこの木に与えた。その後日露戦争の勝利の記念樹として月桂樹が広く植えられるに及んで、日本でも『月桂樹』『月桂冠』の意味を認識するようになったのである。

月桂樹の由来はギリシャ神話で、太陽神アポロンに追いつめられたニンフの『ダフネ』が、月桂樹に変身して身を守ったという故事によるものである。しかしダフネに関する物語は他にもあって、こちらの方はダフネ(月桂樹)の森で生まれた牧童ということになっている。ともあれそれ以来アポロンに因んで、詩歌、音楽、弓術などで秀でた成績を残した人の頭上に、この枝で編んだ冠が飾られるようになった。常緑の葉は勝利と栄誉の象徴となり、悪魔を退散させるという俗信も生まれ、オリンピックの勝者や、ローマでは戦勝の将軍などにも贈られるようになったのである。

葉を乾燥させたものはベイリーフ(bay leaf)またはローレル(laurel)といい独特の香味を持っている。料理の香料としてまた調味料として、スープやシチュー、肉料理には欠かすことのできないスパイスである。葉に含まれる成分は月桂油で、その主成分は『シネオール』で香水の原料になっている。この他にもユーゲノール、ゲラニオール、ピネン、テルピネンなどを含有しており、この葉を陰干しにしたものを『月桂葉』(ゲッケイヨウ)といい、煎じて神経痛やリュウマチなどにも用いられる。塾果を乾燥させたものは『月桂実』(ゲッケイジツ)と呼び、芳香性健胃剤としても利用されている。また月桂樹の葉を枕の下に敷いて寝る習慣もあったが、これは芳香による催眠効果を期待したためであろう。また材は極めて硬く家具や道具類に用いられている。

月桂樹の繁殖は挿し木か、実生である。陽のよく当たる場所であれば、大きく育つ。しかし土壌は弱アルカリ性が良く、毎年、石灰を入れるようにする。



満開の月桂樹、ヨーロッパでは古くから香辛料として用いられてきた(埼玉県川口市安行見本園)



ゲッケイジュは神経痛やリュウマチによいばかりか、唾液の分泌を促し食欲を増進させる効果が期待され、血管を拡張する作用を示す物質が含まれているという(埼玉県川口市見本園)。



歴史にも多くの記録をとどめたゲッケイジュの花(埼玉県川口市)。

[目次に戻る](#)